

【特別寄稿】

## 北海道功労賞を受賞して

岡田 淳子

平成 30 年度に「北海道功労賞」をいただきました。北海道で最高のこの賞は昭和 44 年に始まり、受賞者は今年 50 回目、160 名に達するそうです。

過去の名簿を見ると、米村喜男衛（第 5 回）、北構保男（第 32 回）両先生の名前が見られます。北海道民族学会は、昭和一桁生まれによって作られたので、明治・大正生まれの先生方は会員ではありませんが、当学会の源流の方々でした。もうお一人、本学会で 4 代目の会長をされた谷本一之（第 38 回）先生の名前があります。そして私は 4 人目、今後この会の中から多くの方が続くことを願っています。

功労賞は、長生きをしてこそいただけるものですが、それにも増して後輩の皆様方の力が大きいと思います。推薦をしてくださるのは後輩の方々だからです。

私は、4 年前に「北海道文化賞」をいただいていた。その時の受賞理由が「北方文化の研究」でしたので、北海道が陽の当たらない文系の基礎科学に、目を向けてくださったことに感動し、大変嬉しく思いました。今回の受賞理由は、「学術振興と男女平等参画社会づくりの推進への貢献」でした。本学会を基礎とする具体的貢献とは言えないかも知れませんが、自分の委員履歴を見ると、改めてこの 40 年、よくぞ北海道のために力を注いできたものだと思います。

申し上げるほどのものでもありませんが、私は太平洋戦争後、神話から始まる日本歴史の改変に悩み、教科書に墨を塗りながら真の日本歴史を求めるために「考古学」へと近づいて行きました。そして、東京で唯一考古学専攻講座があった明治大学史学地理学科に入學し、考古学の基礎である発掘の仕方や土器型式を、精力的に学びました。

しかし卒業を待たずに「日本人の歴史」だけではなく、「地球上の人類史」に興味が広がり、大学院は「人類学科」に進みました。それ以来、考古学と人類学の両面から文化の研究を進めることになりました。

私の研究人生は決して平坦なものではありません。もちろん私自身の能力不足が大きいのですが、研究、就職と結婚、出産育児の両立は、男性社会の中で思うように行かないことが多くありました。それでも、ここまで来られたのは凶と吉が交互にやって来て、運命を嘆くばかりではいけない、と思えたからです。

私がどんな研究をしてきたか、テーマについて知る人は少ないと思います。東京渋谷で生まれ育った私が、最初に行ったのは「古墳時代の土器の研究」で、日本考古学プロパーの分野でした。北海道へ移住してからも道内の「土師器」と「須恵器」に目を注いできました。現在では北海道にも古墳時代中期の 5 世紀からこれらの土器が移入され、平安時代の 9 世紀には全道に広がっていたことが分かっています。

ずっと関心を持ち続けている、もう一つのテーマは「遺跡形成論」で、遺跡が何を契機に形成されるのか、人の移動の在りかたを考えました。日本では残る遺物が 5～10% と少なく不利なため、米国乾燥地のプエブロ文化で農耕村落社会を、アラスカ西部のユピッ

ク・エスキモーで採集狩猟社会の遺跡形成を追いました。そして、移動の原理に一定の結論を得たと考えています。これは考古学と文化人類学の両面から探ったものです。

1971年に準備をし、1972年から始めたアラスカでのフィールドワークは、30年に及びました。1971年は、ANCSA（アラスカ先住民土地問題解決法）が成立した年に当たります。文部省の科学研究費をいただき、アラスカ州の西南部から東南部まで4地域で発掘と村落の調査を続け、アラスカ先住民の生活史を探ってきました。日本と比較しながら解釈を重ね、20世紀の終わりには、アラスカ東南端のメトラカトラ・インディアンコミュニティで、近代化＝現代文明化にポイントを当てた調査を一段落させました。先住民族が幸せに近代化を果たすために必要なことを、フィールドワークから学んだのです。

学生時代から研究仲間だった亡き夫、岡田宏明と共にプロジェクトを進め、教え子を含む後輩たちに手伝ってもらったことが、海外での調査を成功させた基礎にあったと考えています。このように記すと、順風満帆の研究生活のように思われがちですが、決してそうではなく、研究職の数が少ない専門分野のため夫は33歳まで、私は35歳まで研究職につけず、経済的には決して豊かではありませんでした。研究費を夫婦二人で得られるようになって、後輩たちに奨学金や研究費の一部を助けられるようになりたいと考えていましたが、果たせぬままに年金生活に入ってしまったことを情けなく思います。

最後に、私にとって最も役立つ賞は、当「北海道民族学会」からいただいた「学会特別賞」でした。大学在任中には毎年教養部で行う「人類学」の講義のために、当年の研究結果の印刷物を手に入れていましたが、最近、大きく進んだ化石人類史、日本人の起源に関する書籍を、副賞でいただいた図書券で3冊求めて読みました。そこにあった新規発見の根拠はDNA偏重で、人類学ではなく人類遺伝学でした。私はやはりクルド人の地域で発見されたネアンデルタレンシスの埋葬骨が、捧げた花の花粉に覆われていたと言ふような、心が分かることに価値を見いだしたいのです。人類学とはそういうものではないかと思っています。

実は、この受賞のセレモニーに、私は出席することが出来ませんでした。滅多に罹らない感冒によって体調を崩し、ストレス一杯になっていました。前々日に、とても直らないと観念し、欠席の連絡をしたところ、当日は、荒山会員が代理で受け取ってくださったそうで、数日後に岩崎会長が、家まで届けてくださいました。当学会の温かな気持ちに触れてとても嬉しく、いつまでもそういう会であって欲しいと願います。

いつの間にか今年「米寿」、人生百年時代に私は若い方々に迷惑をかけないよう、映像や図書を楽しみながら家事の手は抜かずに、人生を全うしたいと思っています。

(平成31年、小正月の日に)

(おかだ・あつこ／北海道民族学会顧問)